



第323号
2014年1月号
www.bestopia.jp

アインザッツは音楽の哲学空間か？

大晦日のベートーヴェン

大晦日、寛永寺(上野)の除夜の鐘が澄み切った夜空に響いている頃、私は東京文化会館(上野)で「第九」の合唱に聴酔し至福の中にいました。最高潮に達したのは元旦0時15分でした。

大晦日の午後1時に始まった「炎のコバケン」(指揮者小林研一郎氏)による「ベートーヴェン全交響曲連続演奏会2013」は休息を挟んで11時間を超えるマラソン演奏であり、飛行機に乗るとパリに到着することになる長丁場です。(実演時間は368分です)

全身を使って情熱的な指揮をされるコバケンは、つとに有名ですが、全曲を一日で振り返すと言うのは快拳と言うより奇拳と言った方がいいかも知れません。

コンサートマスターを務めた、篠崎史紀氏も全曲で素晴らしいリーダーシップを発揮され自らの渾身の演奏で奏者の疲れを吹き飛ばしコバケンを支えられました。

彼が休憩中に壇上に上がり三枝成彰氏のインタビューに応じられたのですが、「この企画について声をかけられたとき、受けるからどうか迷った。体力よりも神経が持つかどうか恐怖を伴う不安があった」とのことです。NHK交響楽団第コンサートをマストマスターという地位にある方がよくこの難題に取り組まれたことに私は敬意を表します。

聴く方もエコノミー症候群に注意しなければなりません。私は自信がなく今まで挑戦できませんでした。

誰が言い出したのか

この全交響曲連続演奏会「ベートーヴェンは凄い」は2013年で第11回目、発案者は1人の女性です。

「もう40年も前主人の転勤で米国ミシガン州の大学町アンナーバーに行きました中略ー大晦日は新年の合図に教会の鐘の音が遠くに聞こえます。学生さんたちがどこかに集まって新年を祝い、そして第九の合唱を歌い出すのです。未来に向かって希望を籠めた夢のある歌声に聞こえました。日本に帰ってからも鐘の音と学生たちの歌声が忘れられず、新年の瞬間に第九の合唱が聴けたらとずっと思っていました。日本では年末になると多くのベートーヴェンの第九が演奏されます。それならいつそ大晦日から元旦にかけて1番から9番まで一気に連続していただき、清々しい気持ちで新年を迎えるこれは夢物語なのでしょうかと三枝先生にお話をしたのが始まりでした」と語るのは高橋泰子さんです。

「それならいっそ」と言う感性(理屈や打算的合理性を超えた興味関心好奇心)が難関を越えさせる原動力となり周りを巻き込んでいったのです。

第1回目(2003年)の指揮者に手を挙げたのは岩城宏之氏(故人)、大友直人氏、金聖響氏の3人で9曲を分担しています。

2004-5年は岩城宏之氏が単独で、特に2005年は病を押しての指揮をされました。2006年に岩城宏之氏を追悼する公演となり9名の指揮者が担って演奏会が続きました。その後は小林研一郎氏が岩城宏之メモリアル・オーケストラを編成して行い、2010年にはロリン・マゼールを招いています。「それは世界中見渡しても私たちくらいのものではないでしょうか」(高橋泰子氏談)

炎のコバケンとベートーヴェン

指揮者小林研一郎氏は「炎のコバケン」と言われるように全身で全霊を込めてタクトを振ることは多くの人が知るところです

氏は、ベートーヴェンについてを次のように記されています。

「強烈な意志で立ちふさがるすべての不幸を乗り越え、人類に希望と愛と勇気を与え、後世の歴史を変えるほどの偉大さで君臨し、永遠不滅の生命を得た英雄」

遠い少年の日に、その第九を震えるような感動の中で聴き、ベートーヴェンに魅かれて作曲家となり、その後、迷いと苦悩を経て指揮者になられた。それ故か、実に謙虚で、指揮台に立つ前に奏者全員に丁寧に挨拶をされる、「宜しくお願ひします。」と言っておられるように聞こえます。指揮台に立つと「炎のコバケン」に大変身です。その情熱的な指揮についていけない人は絶対にいないだろうと感じます。

「我々がベートーヴェンを現代によみがえらせようと試みるときの難題は行間の読みである。あまりにも偉大すぎるこの人の心を後世の我々に読める術があるのだろうか。ベートーヴェンの書いた音楽を実際には、我々はまだ聴いていないのではないかと、楽譜の中に表すことができなかつた空間には、彼の無限の宇宙を書き表したに相違ない」「行間の宇宙は何を語っているのかを追求し続けなければならない」とベートーヴェンの芸術を哲学しながらタクトを振っておられる。

「音楽は芸術である」と言ったのは？

「音楽は芸術である」と最初に言ったのはベートーヴェンであることを今回知りました。

「そして芸術は百年後の人類の財産になるようなものでなければならない」との預言的な言葉が現実化しているのも驚きと言う他ありません。

私は音楽の知識は全くありませんが、交響曲を聞きながら人生を考えることが少なくありませんでした。この楽章は人生の中で何を訴えようとしているのか？

何を意味しているのか？私の感性は何を引き出せることができるのか？

ある時には、意図的に考える前に、自然に音に合わせて人生のある局面が浮かんでくることもしばしばです。

今回は音痴でも学び続けると、作者の真髄にも迫りゆくことができるかも知れないと淡い光明が見えました。

然し、現代はベートーヴェンのような音楽は敬遠される時代だと専門家が指摘しています。私も多くの知識人から「なぜあんな暗い音楽が好きなのか？」としばしば質問されてきました。今はその方々に自信をもって「哲学するために聴いている」と答えることができます。

又、意味づけるのは聴く者の自由ですから芸術には不思議な妙味があります。例えば「英雄」の第3楽章は何を意味しているのか、長い間考え続けていました。第2楽章は葬送行進曲ですからその後起こることはなにか？今回コバケンの「英雄」を聴いて一つのヒントが得られました。第3楽章は陰府の国を表しており、最終章に蘇りの意味を読み取りました。(私の仮説です)これで交響曲3番をより身近に聴くことができるようになりました。

歓喜を喚起する

今回、第九は高橋泰子さんの想いを実現するように企画され、合唱は年を跨ぐ橋となり、断絶性と連続性の緊張関係を訴えるかのように私には感じられました。

合唱の歌詞はシラーの歓喜の歌からの引用ですが、冒頭の言葉はベートーヴェンの独自の呼びかけです。「おお、友よ。そのような調べではない、もっと心地よい調べを奏ではないか」と言って第一楽章から第三楽章までの調べを否定します。然し、第三楽章はとても美しく、これを否定されると、どんな調べがあるのかと私は感じますが、芸術家はそれを追求しているのです。ベートーヴェンが考える「最高の歓喜」は神の国へ入る時に感じるのではないか――(私の仮説です)根拠はシラーの詩歌の歌い出しです。「我らは、歓喜に酔いしれて、あなたの聖なる地に歩みを進めます」若きベートーヴェンがウィーンにくる前に心酔した詩歌です。

ここには神学的な解釈が必要になりますが、歓喜(Freude)と悦び(Wollust)を使い分けているシラーの心情を研究せねばなりません。

ベートーヴェンの求める歓喜の調べは、辛酸な苦悩をなめ尽くした彼の叫びではなかったのでしょうか？

「苦悩を突き抜け歓喜に至る」この言葉は人類に共通する希望の言葉になりました。

「歓喜を喚起する」言い得て妙なりの言葉です。

孫から学んだアインザッツ

コバケンの指揮は2000人を越える全ての観衆の疲れを飛翔し歓喜に変えるものでした。特に第九は「切れ味」と言いますか、節と節の間を奏者が一糸乱れず弾ける指揮は見事で、その一秒以下の無言の間こそ楽譜にない行間の意味ではないかと思われました。(孫の光棋はそれをアインザッツと言うと教えてくれました。休止後における歌い始め、奏し始めの瞬間のこと、音の終わりの瞬間をリリースという。アインザッツが良いと金賞がとれる)長丁場一緒にいた聴衆も、その間(アインザッツ)に引き込まれたのを私は感じました。アインザッツは第九の醍醐味かも知れません。

合唱団も全員一致で一所懸命の美しいハーモニー、それなのにソリストの歌唱力が優雅に響き渡り、歓喜、歓喜と感謝一杯の夢のような空間に私は居りました。

帰る手段はなくホテルに泊まり、朝早く自宅に戻り、お雑煮を頂き、孫とその日の日課、国語長文特訓を無事に終え、誠に良き元旦でした。

